

スマートキッズ発達支援研究所便り「きらっと」33号

2022年10月1日

研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>

## 学習障害にどのように気づき、どのような支援が必要か

主席研究員 河村 久



近年、学習障害という「障害」の名前があることは、多くの人が知るようになってきています。しかし、一般的に言われる読み、書き、計算を行うことについて著しい困難があるという理解では、学習障害以外の様々な障害、例えば知的障害と区別することができず適切な支援につながらなかったり、逆に「障害」という言葉に反応して必要な支援を拒んだりするようなこともまだまだあるように思います。

実際、文字の読み取りや文章の意味の把握が難しい子どもや、正確な字形で文字を書くことが苦手な子ども、1桁の簡単な計算でも指を使わないとできなかつたり、算数の問題を解くのに公式を適用することが難しかったりする子どもなどは、「学習障害」以外でもたくさんいます。精神科の臨床医が診断によく用いているDSM-5 という診断基準(アメリカ精神医学会の「精神疾患の分類と診断の手引 第5版」)では、知的障害、非矯正視力または聴力、他の精神または神経疾患、心理社会的逆境、学業に用いる言語の習熟度不足、不適切な教育指導による学習困難は除外されています。読み、書き、計算といった学習の基礎的なスキルが身につかず、つまづいている子どものなかには、上記の除外要因によるものも多く含まれているものと考えする必要があります。学習のつまづきは、就学後、教科の学習を始めたころに他の子どもと較べて明らかに苦戦している様子があることから気付かれることが多いわけですが、短絡的に「学習障害」と結び付けて考えるのではなく、いろいろな可能性を視野に入れて原因を考えていく慎重な姿勢が大切でしょう。

具体的に支援を始める段階となっても、どこがどのようにうまくできていないのか、一人一人の学習の様子をしっかり観察して把握しないと、的確な支援はできません。

文字の読みがスムーズにできない要因の第一に考えられるのは、そもそも文字の形を正確に捉えることができていない場合です。こうした子どもをみていると、「あ」と「お」、「い」と「こ」、「ね」と「れ」、「日」と「月」など、形が似ている文字を判別するのに時間がかかり、間違ってしまうこともあります。この原因には、形態認知の発達の遅れや部分部分の違いに注意を振り向けることの困難さなどが関係していると考えられますし、目の使い方が上手にできていない場合もあります。

形態認知に困難のある子どもの場合には、文字を拡大して、違いを捉えやすくしたり、視認性の高いユニバーサルフォントに替えて読み取りやすくしたりするといった支援が行われています。このような支援は、近年GIGA スクール構想のもとで、小学校等にデジタル教科書が導入されつつあり、デジタル教科書を使えば、いとも簡単に文字の拡大やフォントの入れ替えなどができるようになりました。また、注意の向け方に課題がある場合には、違いのある部分に印をつけて注意を促すといった方法がとられますが、こうした援助を行いつつ、次第に子ども本人が、どこに注意を向けていけばよいのかを学習していくことが大切となります。

さらに、目の使い方が上手でない子どもに、視線追跡装置を装着させて文字を読ませると、瞬時に文字を判別できない場合、同じところを何度も目で追っていたり、時には他の場所に視線がそれてしまったり、また戻って目で文字の線を追っていくうちに、どこを読んでいたか分からなくなってしまうといった様子が見られます。こうした場合には、いわゆるビジョントレーニングという方法が用いられることがあります。系統的な目の動かし方をゲーム的な要素を取り入れながら、習得させていきます。

読みの困難の二つ目の要因と考えられることは、文字の音韻化がうまくできていないということです。文字を音韻に変換するデコーディングの過程で生じる読字障害は、視覚的にとらえた文字や単語を頭の中で音韻に変換することが困難なために生じるもので、発達性ディスレクシアと呼ばれます。基本的な特徴は文字から音韻への変換困難ですが、音韻への変換に時間と労力を費やすため文章の内容理解にまで到達しないことが多くあります。また、読みの障害と書字の障害を合併することが多いといわれます。かな文字では特殊音節の読みが困難なことが特徴です。特殊音節とは「きゃ」「りょ」などの拗音、あ行の文字で表される長音(伸ばす音)、小さい「っ」で表される促音(つまる音)、「ん」と表記する撥音(はねる音)を指します。拗促音(「ちよっと」など)や拗長音(「ぎゅうにゅう」など)のように特殊音節が重なると混乱が大きくなる傾向が見受けられます。漢字の読み困難の状態像は「読み方が思い浮かばない」、「当該漢字の別の読み方に誤る(赤飯→あかはん)」、「意味の類似した別の漢字の読み方をする(図工→こうさく)」などです。

こうした場合には、ひらがなの特殊音節部分に印をつけて読む練習と分節ごとに「／」を入れて単語や文節にまとめて読む練習が行われます。最近では、「MIM」と呼ばれる読みのアセスメントと指導プログラムが一体となったツールを使用して学校全体で取り組む例も見られます。

読みの困難の第三の要因は、「意味処理」にかかわる困難です。音声言語に変換された文の内容を理解する過程で生じる読字障害です。文字→音韻変換に問題がなく、それ以降の過程である文の意味理解に特異的な障害のある群では、基本的には書字の障害を合併しない、言語障害との関連が示唆されます。音韻処理は、脳の角回、縁上回といわれる領域で行われ、デコーディング処理された情報は、言語中枢の一つであるブローカ野に送られ、そこで意味と結び付けられ、文法に基づいて正しく読めるようになります。しかし、その機能が十分働いていないと、文字は読めていても意味が分からないという現象が起きてしまいます。

こうした場合には、「主語—**述語**」といった単純な文から始め、次第に複雑な構成の文へ、さらに、いくつかの段落で構成される文章へと、文、文章を読んだり、自分で短い文、文章を書いたりする練習をスモールステップで指導していく必要があります。

そろそろ紙数が尽きてしまいます。学習障害のすべてについて触れることができませんでした。またの機会があればこの続きを書きたいと思いますので、ご了承ください。

近年、通級による指導が小学校、中学校ばかりでなく、高等学校にも対象が拡大され、学習障害のある児童生徒の指導・支援が広く行われるようになってきました。初等・中等教育ばかりでなく、高等教育に至っても、さらに人生のすべての期間において、学ぶための基礎的スキルである読み・書き・計算が円滑にできないということは、大きなハンディキャップといえます。できうる限り、人生の早い時期に、その困難を軽減・克服していけるよう、正確な実態把握のもとに的確な援助が進められなければならないと考えているところです。



聖徳大学大学院教職研究科 教授 河村 久

私は、現職に就く前には東京都の公立学校の教員、小学校長・幼稚園長として、主として障害のある子どもの教育に従事してきました。

この間、全国特別支援学級設置学校長協会会長(平成 19 年度)、中央教育審議会専門委員(平成 18 年度～平成 23 年度)等を歴任しました。近年は、特別支援学校の学校運営のお手伝いをするとともに、通常の学級に在籍する発達障害のある子どもの教育に関する研究や現職の先生方への支援にかかわることが多くなってきました。

本研究所の活動に参画することによって、生きにくさを感じている子どもたちの発達支援と生活の充実のためにお役に立つことができたら、大変幸せなことと思っております。

